

ごはんつぶおかよ六地藏の話

深渡戸に、おかよという大変感心な嫁さんがおりました。ところが、家が貧しかったので毎日苦勞をしておりました。

おかよは、食べのこしのご飯粒が六粒になると、野良仕事に出た時に、道端に立っている六角地藏の石塔の地藏様のお口のところへツバでねばつけ「どうぞ、お食べ下さい六地藏！」と両手を合わせると、お地藏様が「どうもありがとう、ご馳走になります。おかよさん！」とニッコリ笑うように見えて、なんともいいないよい気分になって、家がまづしく貧乏で三度の食事もろくろく食べられなくとも：一生懸命働くことができるのでした。

そうして一年ほどたちました。ある年の夏のはじめ頃から、悪い風邪引きが大流行です。どこの家でも風邪を引かない人はいりません。皆んな熱を出してウンウンうなあっておりました。おかよの家でも旦那の宇作さんも、お父さんも、お母さんもみんななねてしまって、田畑の仕事がとてもとてもおくれて困ってしまいました。

ところがある日の夕方、手拭で頬かむりした見なれない六人の若者が入口に立って、「おかよさん、田畑の仕事を私たちが手伝ってあげよう。お金も六人が手間賃を稼いであげるから心配をしないで下さいね」と言って姿を消しました。おかよさんは、不思議なこともあるものだ、心の中で思いながら、それから四、五日は、家の人たちが熱が高くウンウンうなあってねていますので、この看病で野良仕事にでられませんでした。やっと熱もさがったので山へ出かけました。六地藏様にお参りをして六粒の飯粒を見て驚きました。田畑が綺麗にたがやされてありました。そればかりではありません。あくる朝、戸をあけて見ると、戸口に六この紙袋がありました。これをあけてみると、その中には、当分遣いきれないほどのお金がありました。一体これは、どうしたことなのでしょう。心すなわ、おかよさんにはそれは誰がやってくれたのか分かりました。

その後 このお地藏様は、ごはんつぶ地藏様とも呼ばれるようになりました。